

### 3. 時代と共に変わる富田

#### 3-1. 江戸時代初期の富田

江戸時代の富田村は、富田町、昭和台町、寿町、栄町、川添町、牧田町、西町、柳川町、北柳川町、南総持寺、北昭和台町、大畑町、宮田町を含めた広い範囲を示しています。

江戸時代の富田村は幕府領と諸藩のめまぐるしい領主の変遷で、十数回の領主変更があった。江戸時代前期の富田については、富田寺内の中核となった教行寺の南と西には御坊内町、東には南岡町、北にはヨコ町・西之町があり、その北辺には東町・中之町・西之口町の三町が東西に続き、教行寺が再興されたのと並行して計画的に造成された寺内町の名残です。東町から西之口町にかけては、典型的な短冊型宅地割をとどめ、この地区が寺内町の商業地区として賑わっていたものと推定されます。

近世初期富田村の商工業を代表したのは、紅屋を中心とする酒造業の展開であった。江戸初期に紅粉屋(紅屋)市郎右衛門一門が徳川家康に商業の特権を安堵されて酒造を開始しました。そして富田酒は急速に名声を高め、延宝8年(1680)には24軒で8,270石を造っています。これは富田村酒造業がもっとも盛んであったころの数字です。

今も清鶴酒造と寿酒造が共に伝統の地酒を守り続けています。

#### 3-2. 江戸中期以降の富田

中世末以来の寺内町・宿町としての富田は、1594年(文録3年)の太閤検地により大きく変貌しました。寺内町としての特権を失い。宿場町としての機能は、西国街道の整備とともに芥川宿へ移行しました。

地場の酒造りは、池田・伊丹の酒造や、灘・今津の酒造に押されて富田酒の醸造は衰退の一途をたどりました。そして富田の酒造業は、幕末で7~8軒になりました。

昭和30年頃まで富田酒造所は、清鶴・国之長・宝雪・朝日西・富寿栄5棟ありました。

現在は、2軒(清鶴・国之長)の酒造家が伝統の製法・技術などを受け継いで、地酒の味を守り伝えています。

#### 3-3. 明治・大正の富田

○ 明治初期には富田村は高槻村より人口が多く栄えていた。

○ 1876年(明治9年)に高槻駅と茨木駅が開設されたが、富田は駅の設置を拒んだといわれている。

その結果、交通の利便性による格差がついて、高槻・茨木がどんどんと栄え始めた。

○ 大正13年(1924)7月に、摂津富田駅が請願駅として開設された。

駅舎及び道路などの土地費用は住民に募金を募って富田村が出しています。

富田駅の開設により駅前が栄え、富田の市場通り(三輪神社の南側の道路)が、衰退した。

○ 1928年(昭和3年)新京阪電鉄の富田町駅(現阪急富田駅)が開設された。

(高槻町駅も同時開設)